

# 富山市任海宮田遺跡発掘調査概要

—個人住宅建設に伴う発掘調査—

1996年3月

富山市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は個人住宅建設に先立つ任海宮田遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は国庫及び県費補助金の交付を得て富山市教育委員会が主体となって実施した。  
調査期間は、平成7年4月20日～同年5月31日にかけて行った。調査面積は165m<sup>2</sup>である。  
遺物整理及び報告書作成は、平成8年1月16日から平成8年3月29日にかけて行なった。
3. 調査は富山市教育委員会 学芸員 堀沢祐一が担当した。
4. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターの指導・助言を受けた。
5. 発掘調査・遺物整理にあたり、次の各氏から有益な助言と協力を得た。記して謝意を表したい。  
上野 章・島田修一・宮田進一・上地所有者 日吉常成（敬称略）
6. 遺構番号は、溝：SD、穴：SK、ピット：P、その他：SXとし、記号の後に通し番号を付け足した。
7. 本書の執筆・編集は、堀沢が行なった。

## 目　　次

I 位置と環境 .....	1 ~ 2
II 調査に至る経緯 .....	3 ~ 7
III 調査の概要 .....	6 ~ 9
IV 遺構と遺物 .....	10~17
V まとめ .....	18~22
遺構配置図 .....	23~24
写真図版 .....	25~32
報告書抄録 .....	33

## I 遺跡の位置と環境

任海宮田遺跡は、富山市の南部、任海地内に所在している。遺跡の概略範囲は、570,000m<sup>2</sup>にも及ぶ広大なものである。この遺跡は、東側500mのところ流れる熊野川と西側1kmの神通川によって形成された扇状地に存在する。標高は約30mを測る。

周辺には、縄文時代から中世にかけて数多くの遺跡が点在する。

縄文時代には、大沢野段丘上に伊豆宮II遺跡が存在する。中期後葉（串田新Ⅱ式中心）の縄文土器が検出されているが、その時期の遺構は確認されていない。栗山A遺跡・大利屋敷遺跡では、晩期の土器、それと付属する落ち込みや穴が見つかっている。

古墳時代には、伊豆宮古墳が河岸段丘上に築かれた。墳丘形態は多角形墳と報告されている。埋葬施設は横穴式石室で主体部は長さ5mで奥壁の幅は1.4mである。試掘調査の際に幅2.5~3mの周溝も確認されている。須恵器・馬具刀子などの鉄製品が出土している。

古代から中世にかけては、周辺に遺跡が急増する。友杉地区から南中田地区の区域である。代表的な遺跡としては吉倉B遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田D遺跡・栗山椿原遺跡・任海砂田遺跡などがあげられる。

奈良・平安時代には、8世紀の段階で小規模な集落が出現し、9~10世紀に掘立柱建物・堅穴住居などによって構成される集落に発展する。本遺跡や吉倉B遺跡では、「城長」・「觀音寺」と書かれた墨書き土器が出土しており、官クラスの施設や寺院などが存在したことを窺わせている。

古代から中世への過渡期にあたり11世紀代に集落の存在が確認されていない空白の時期がある。

中世（12世紀）にはいると、また集落が出現する。前記した遺跡の上層に集落が形成される例が多い。13・14世紀代と存続していく。

この時期の文献資料を探ると「賀茂別雷神社文書」に寿永3年（1128）源頼朝が後白河法皇の院宣を沙汰し、そのなかに賀茂社領越中国新保御厨が含まれている。新保地区周辺が新保御厨の推定地のひとつとされている。「新保御厨」は、延徳2年（1490）まで賀茂社との関係があったと記録に残っている。

また、任海池原寺・懇在寺などが存在していたらしいが、詳細については不明である。任海池原寺跡の推定地から須恵器・珠洲焼・青磁が出土している。

江戸期には、富山から飛騨に抜けた飛騨街道がメインルートとして熊野川沿いを南北に走っていた。その街道から現在任海橋付近で岩木道・八尾道が分岐していった。任海橋あたりには熊野川の「徒歩渡り」があり、富山・飛騨・任海・下熊野・八尾方面からの街道が交差し、往来が頻繁に行なわれていたようである。

このように、吉倉B遺跡周辺では、大沢野段丘の縄文時代の遺跡にはじまり、古墳時代には古墳の造営が行なわれた。奈良時代から南北朝時代に一段低い扇状地に集落が営まれた。この地帯は、神通川・熊野川に挟まれ、水量も豊富で生活・交通の便もよいところと思われる。しかし、両河川の氾濫は激しく、それとの戦いを繰り返しながら人々は集落を保持していったのであろう。



1. 任海宮田遺跡、2. 吉倉B遺跡、3. 友杉遺跡、4. 任海遺跡、5. 任海鎌倉遺跡、6. 南中田D遺跡、
7. 任海砂田遺跡、8. 栗山塚、9. 栗山椿原遺跡、10. 南中田C遺跡、11. 南中田B遺跡、12. 南中田A遺跡、
13. 惣在寺廻寺、14. 栗山A遺跡、15. 大利屋敷遺跡、16. 大利遺跡、17. 福居古墳、18. 伊豆宮II遺跡、19. 円教寺遺跡、
20. 伊豆宮古墳、21. 雄川館跡、22. 上野井田遺跡、23. 二俣遺跡、24. 石田北遺跡、25. 上野遺跡、26. 石田遺跡、
27. 上野遺跡、28. 経力遺跡、29. 吉岡遺跡、30. 惣王寺遺跡、31. 若竹町遺跡、32. 下熊野遺跡、33. 安養寺遺跡、
34. 宮保遺跡、35. 森田・森田理泉寺跡、36. 辰尾遺跡、37. 上熊野遺跡、38. 杉瀬遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

## II 調査に至る経緯

はじめに 任海宮田遺跡は1988年市教育委員会が実施した分布調査の結果、埋蔵文化財包蔵地として確認された。現在までに、道路・個人住宅などの開発行為にともない試掘調査・本調査を実施している。ここでは、過去の調査結果について年度をとって簡単に概要を述べる。

1989年度 県道建設に先立ち試掘調査を実施した。任海宮田遺跡でのはじめての調査事例である。調査からは、平安時代前半（9世紀後半）を中心とした集落跡が確認した。遺構は掘立柱建物跡・溝跡などがある。

1990年度 前年度の試掘調査結果にもとづき遺跡が所在した750m<sup>2</sup>の本調査を実施した。平安時代前期の住居跡やあるいは作業工房と考えられる竪穴状遺構、掘立柱建物数棟などを検出した。

出土遺物には、硯などがあり、文字を書くことのできる識字者がいたものと考えている。一般農村集落とは趣の違うもので、莊園に関連した集落跡の存在が指摘されている。

1991年度 市道・県道建設に先立つ試掘調査を1件・本調査を1件実施した。また個人住宅建設に先立つ試掘調査・本調査を1件づつ実施した。前者からは、古代と中世の2時期の遺跡面を確認した。この調査からは、「観音寺」「城長」の墨書き土器が出土し、遺跡の性格を考える上で注目される。

1993年度 県道建設に先立ち試掘調査2件と本調査3件を実施した。本調査からは、奈良～平安時代の竪穴住居跡・中世の掘立柱建物跡を確認した。墨書き土器も出土している。

1994年度 本調査1件と試掘調査5件を実施した。本調査は、個人店舗建設に伴うもので、古代の掘立柱建物1棟・古代から中世の河川跡・中世の銀治遺構を検出した。

また、今回の調査区の北側で、とやま健康村建設に先立ち試掘調査を行なった。古代から中世にかけての掘立柱建物や竪穴住居が30棟ほど確認し、集落は2ブロックに分かれて形成されている。この調査では熊野川のすぐ西側で古代と中世の2時期の遺構を確認した。また試掘調査結果、任海宮田遺跡の北東部分に、新しい遺跡の所在を確認している。県埋文センターは、任海宮田遺跡がまだ北東方向に延びるものとし、自然地形等によって遺跡が分断されたものとした。

1995年度 本調査2件と試掘調査5件を実施した。本調査は、市道およびとやま健康村建設に先立ち実施した。市道建設に先立つ本調査面積は4,000m<sup>2</sup>である。調査からは古代の竪穴住居跡（4棟）・河川跡・溝跡などを検出した。河川跡からは墨書き土器が4点出土している。そのひとつは「大」と墨書きされている。

また、県道の歩道拡幅に先立つ試掘調査では、熊野川にかかる任海橋の西側で、古代の掘立柱建物跡の柱穴や溝跡を検出した。

No.	調査年	調査主体	調査面積 (m <sup>2</sup> )		遺 構	遺 物	備 考
1	1989	市	2,800	試	平安/穴・溝	土師器・須恵器・土師質土器・珠洲焼・越前系陶器・砥石・鉄器	
2	1990	市	750	本	平安/堅穴状遺構1基・穴・溝	須恵器・土師器・硯・製塙土器・土錐砥石・中世の陶器(珠洲・越前系)・土師質土器・青磁	
3	1991	市	2,100	試	平安/溝・穴	須恵器・土師器	
4	1991	市	2,983	本	堅穴住居跡・掘立柱建物跡・穴・溝跡・川跡	土師器・須恵器・土錐・鉄滓・鉄器(釘・刀子等)・製塙土器・羽口・砥石・珠洲焼・越前系陶器・土師質皿・青磁・炭化物・石片・木片	
5	1991	市	1,000	試	平安～中世/穴・溝跡	土師器・須恵器・中世陶器(珠洲焼・越前系陶器等)・青磁・鉄器(釘等)・砥石	
6	1991	市	2,200	本	奈良～近世/堅穴住居跡・掘立柱建物跡・河川跡・土壤・穴・溝跡・井戸跡	土師器・須恵器・土錐・製塙土器・砥石・敵石・鉄製品・鉄滓・銅滓・羽口・浄片・墨書き土器・炭化米?・土師質土器・珠洲焼・越前系陶器・灰釉陶器・青磁・白磁・近世陶磁器	
7	1993	市	2,200	試	中世/穴・溝	土師質小皿・珠洲焼・鉄器・鉄滓	
8	1993	市	122	本	奈良～平安/堅穴住居跡・掘立柱建物跡・穴・溝	土師器・須恵器・鉄器・鉄滓	
9	1993	市	2,419	本	奈良・平安/堅穴住居跡、中世～近代/掘立柱建物跡・穴・溝	須恵器・土師器・土錐・鉄器・珠洲焼・土師質土器・中世陶器・砥石・古錢骨片・近世陶磁器	
10	1993	市	1,424	試	穴・溝	土器細片	
11	1994	市	188	本	中世/穴・溝	土師質土器・珠洲焼	
12	1994	市	240	本	古代～中世/掘立柱建物跡1棟・河川跡1条・鐵冶遺構	須恵器・土師器・珠洲焼・青磁	
13	1994	市	40,600	試	古代/掘立柱建物跡・堅穴建物跡30棟・中世/掘立柱建物跡・堅穴状土坑・溝・近世・近代/用水・河川跡	須恵器・土師器・中世土師器・珠洲青磁・瀬戸美濃・越中瀬戸・伊万里	
14	1994	市	499	試	中世/溝3条・櫛集中土坑3箇所・柱穴1箇所	須恵器・土師質土器・珠洲焼	
15	1994	市	9,000	試	穴・溝・戰国時代の館の掘跡の一部	須恵器・土師器・灰釉陶器・土師質土器・珠洲焼・青磁	

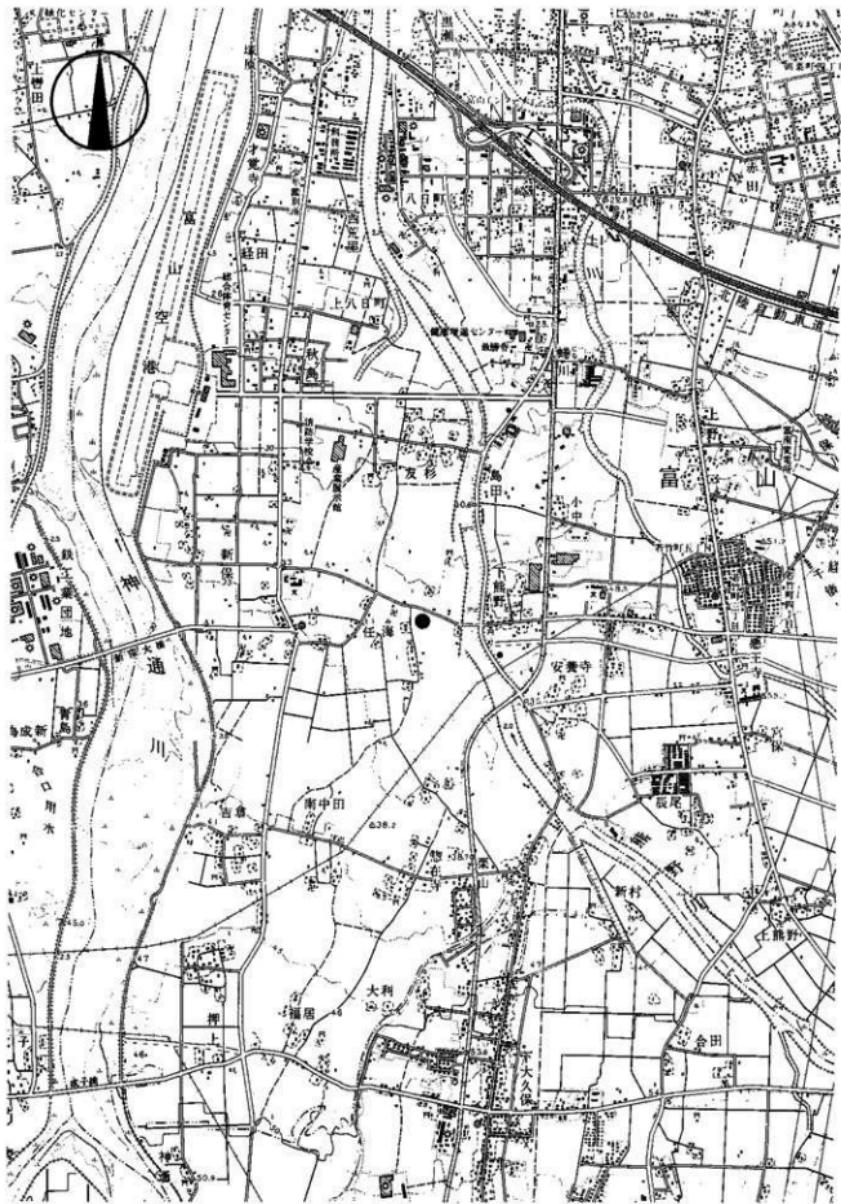
16	1995	市	4,320	試	穴・溝	なし	
17	1995	市	2,200	試	溝・旧河川跡	土師器・珠洲焼	
18	1995	市	4,000	本	古代/堅穴住居4棟、旧河川跡(古代一中世)	須恵器・土師器・土師質土器・珠洲焼・鉄製品・古錢・墨書き器	
19	1995	市	195	試	古代/掘立柱建物・溝	須恵器・土師器	
20	1995	市	50	試	なし	なし	
21	1995	市	545	試	古代/穴・溝	須恵器・土師器	
22	1995	市	187	試	古代/穴・溝	須恵器・土師器・鉄津	

①. No.は下図の番号に対応。 ②. 県は富山県教育委員会(埋分センター含む)。 ③. 市は富山市教育委員会

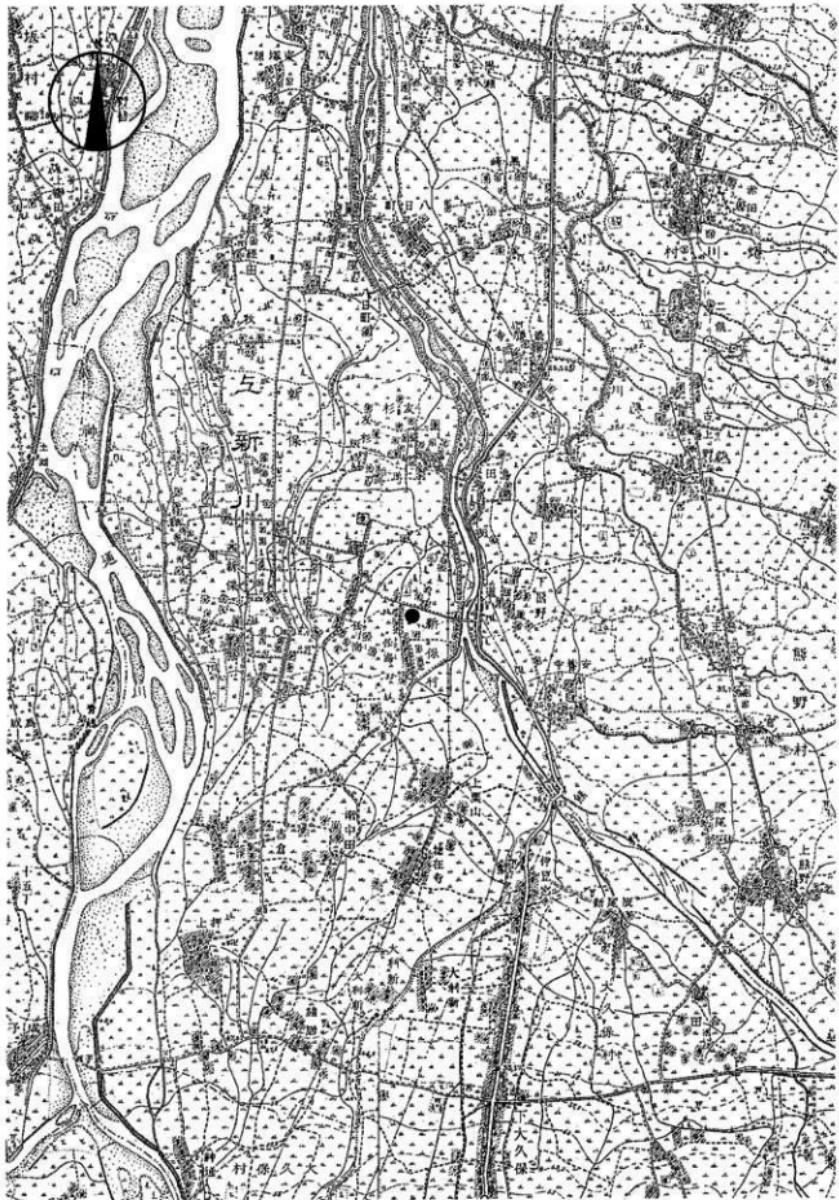
④. 調査面積、試掘の場合対象面積。 ⑤. 本は本調査、試は試掘調査。

表 過去の任海宮田遺跡調査内容一覧





第2図 調査地区周辺の地形 (1:50,000)



第3図 明治43年大日本帝国陸地測量部測図地形図 (1:50,000)

### III 調査の概要

#### 1. 調査に至るまで

平成6年11月、富山市任海地内の個人住宅建設に先立ち埋蔵文化財所在確認依頼がなされた。建設予定地499m<sup>2</sup>は任海宮田遺跡（市遺跡番号501）に該当するため試掘調査が必要と回答した。同年12月に試掘調査を実施し、開発予定地のはば全城にわたり遺跡の所在を確認した。調査からは須恵器や土師質土器、珠洲焼などが出土し、中世遺構を確認した。

その後、確認された埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、宅地建設部分にかかる165m<sup>2</sup>を発掘調査する運びになった。

#### 2. 調査の方法

発掘調査は、重機による水田表土耕土後、遺物包含層を取りのぞき1層目の遺構を検出した。遺構位置を図面に記し、各遺構の土層実測・遺物実測・写真撮影などの発掘作業を実施した。これと平行して、2層目遺構の遺物包含層発掘を行い、2層目の遺構を検出した。土層堆積状況確認のために、調査区中央部分に南北にベルトを設定し、各遺構について1層目同様の発掘作業を実施した。遺構の発掘作業が終了し、北側より調査区の全景を撮影した。この撮影後、調査区のはば中央部分付近を掘り下げた。試掘調査の段階で、2層目の遺構確認の際に、確認面の下から黒色土の遺構に堆積した状態の覆土と思われるもの一部が見受けられ気に掛かっていたところであった。3層目の遺構を確認し、発掘作業を行い、再び全体撮影をした。その後、調査区の周囲の土層実測をし、調査は完了した。

#### 3. 基本層序（第16図）

1層：水田耕作土。厚さ18cm。灰色を呈している。

2層：灰赤色土。

3層：1層と同様。

4層：2層と同様。1～4層までが耕作等に関係のある層。

5層：厚さ10cm。褐灰色土。すこし赤褐色の粒子が含まれる。

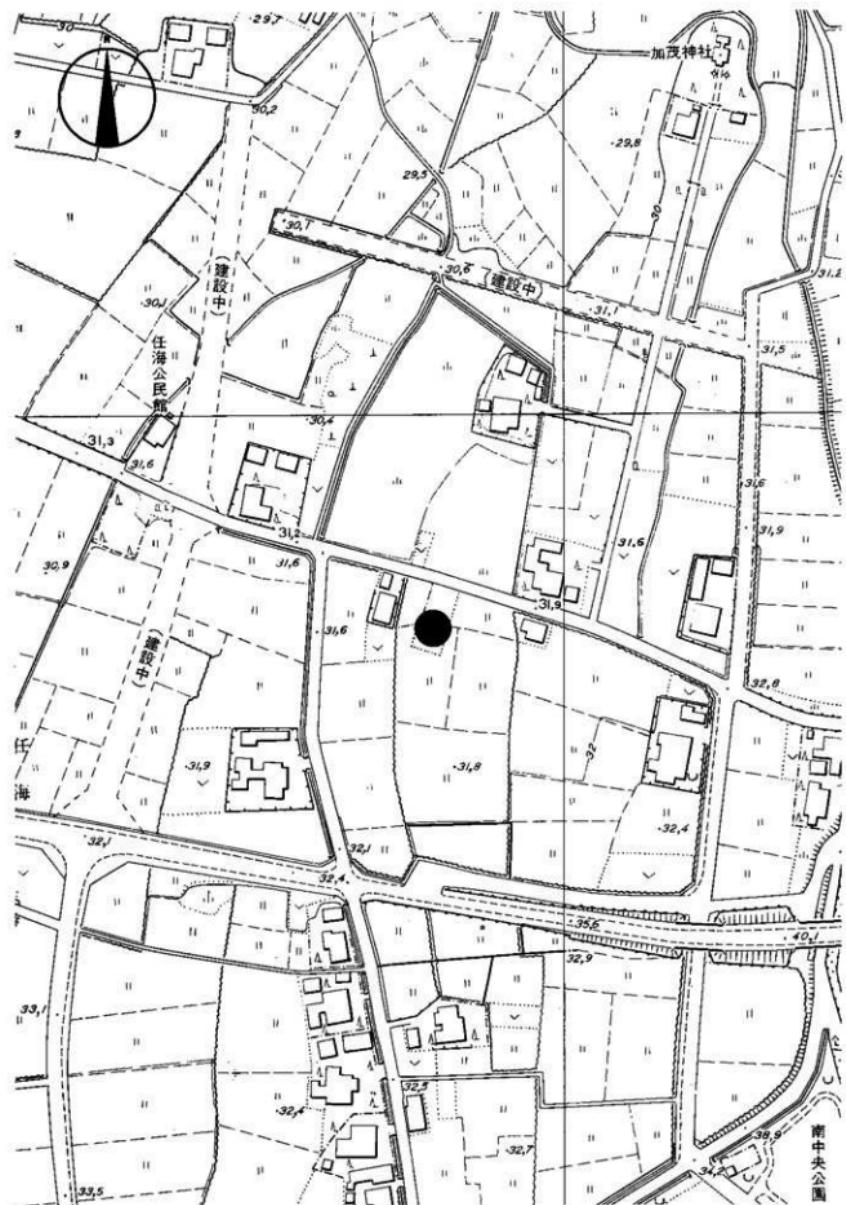
この層が、1層目遺構の遺物包含層である。須恵器・土師器などの古代土器や土師質土器・珠洲焼などの中世土器がほぼ半分の割合で含まれる。

6層：黄褐色の遺構検出面である。この層は、調査区南から5mの地点から北に向かって少しづつ落ちる。ここに

7層の土が堆積している。この下は礫層である。

7層：褐灰色土。黒褐色粒子が含まれている。厚さ14cm。2層遺構の遺物包含層である。中世土器が、ほとんどである。

8層：6層中に含まれる。黑色土である。3層遺構の覆土である。



第4図 調査位置図 (1:2,500)

## IV 遺構と遺物

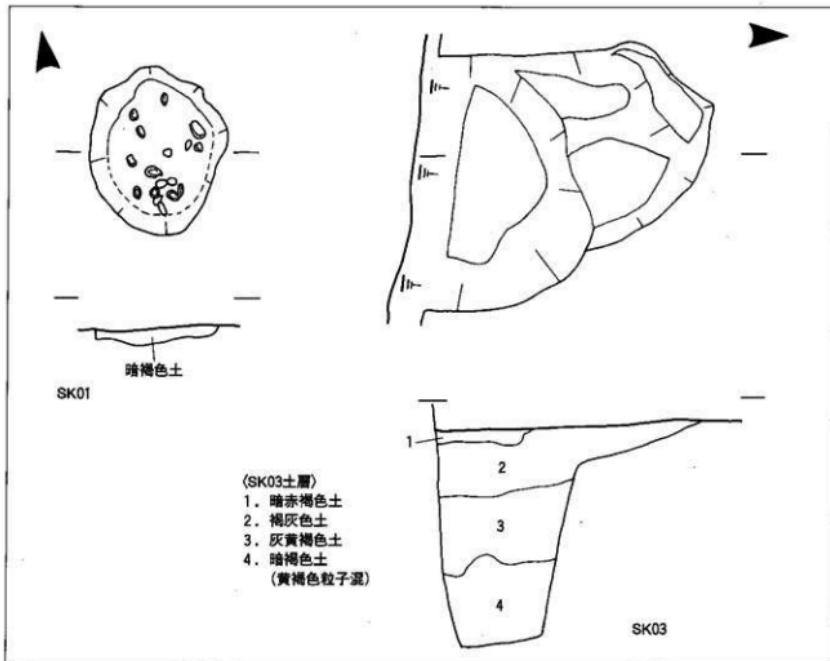
### 1. 1層目の遺構

調査区の南端から5mまでの部分で、土壤2ヵ所・穴6ヵ所を検出した。

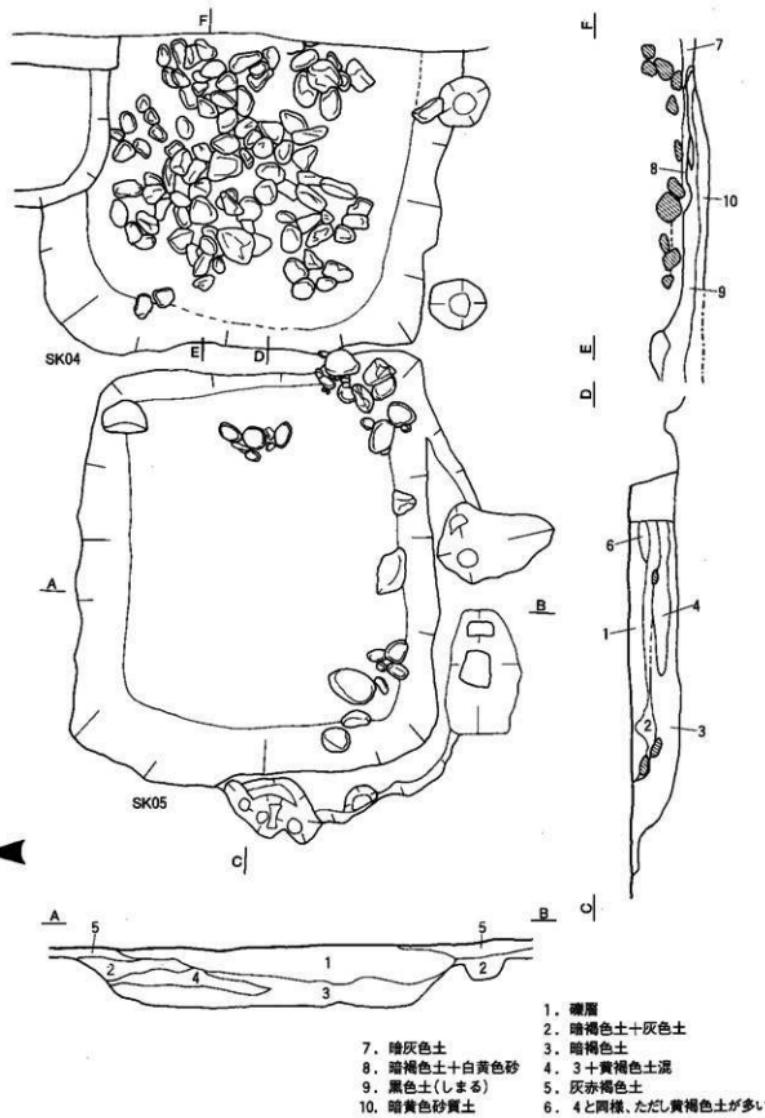
SK01（第5図）調査区南東部で検出。長軸1.4m、短軸1.2m、深さ10cmでやや椭円形の平面形を呈した浅い土壤である。土壤内には、拳大の礫が若干含まれている。遺構の覆土は暗褐色土の単層である。遺物は、古代の土師器片が2点出土している。

SK03（第5図）調査区の南端で検出。調査区外南に伸びるため、遺構全体の平面形は不明である。検出した部分については、長椭円形である。長軸2m、短軸2.1m、深さ1.8m。土壤の断面は、北から1mほどまで緩やかに傾斜し、そこからほぼ直ぐに落ちる。地山から20cm下のところに幅20cmの礫の層があり、それを突き破っている。遺構の底部は平らで、そこには人頭大の礫が数多くあった。

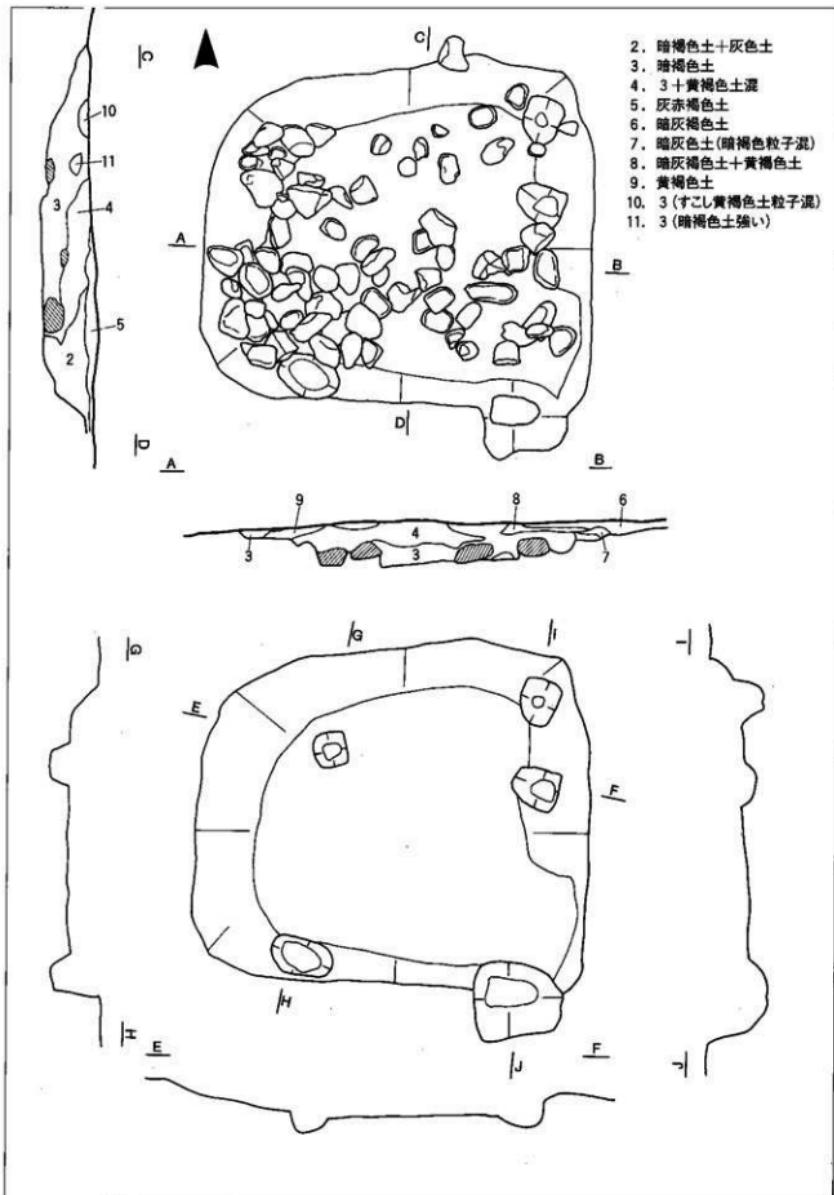
現在は土壤として取り扱っているが、素掘りの井戸跡の可能性がある。しかし現在は漏水はない。遺物は、珠洲焼土師質土器の底部がある。



第5図 SK01、SK03 (S = 1:40) L = 30.700m



第6図 SK04、SK05 (S = 1:40) L = 30.500m



第7図 SK06 (S = 1:40) L = 30.700m

## 2. 2層目の遺構

2層の遺構としては、土壙5ヵ所、溝跡2条、穴を多数検出した。

SX04（第6図）調査区のほぼ中央部で検出。調査区外東側に伸びる。この土壙はSX02と切り合い関係がありSX02を切っている。規模は長軸3.0m、短軸2.6m、深さは55cmである。平面形は隅丸方形。土壙内には人頭大・拳大の大きさの礫が集中して見られる。これらは、意図的に土壙内に置かれたものではなく、乱雑に廃棄された雰囲気である。礫の大きさもまちまちで一定ではない。なかには、火を受けた痕跡のある石も含まれている。覆土は2層に分かれ、上層は黒褐色粘質土が混じった褐灰色土。下層は暗灰褐色土（黄褐色ブロック・黒褐色ブロック混り）である土壙内の礫は下層中である。遺物は土師質土器がある。

SX05（第6図）調査区のほぼ中央部で検出。SX04の西側に隣接している。長軸3.3m、短軸2.9m、深さ50cmの隅丸方形の土壙である。東西にやや長い。長軸30~40cm礫と小石が南東及び南西隅に配されている。覆土は暗褐色土の上層に、小砂利を含んだ層が厚さ30cmほど堆積している。この層の中、珠洲焼・土師質土器などの遺物が含まれている。これらの遺物のほかに、須恵器、土師器、八尾焼がある。

SX06（第7図）調査区の北端で検出し、SK05の北側に位置している。長軸3.2m、短軸2.7m、深さ44cmの隅丸方形の土壙である。東西にやや長い。この土壙もSK04同様に礫が集中して見られた。礫は長軸30cm代のものが多く含まれている。覆土は暗褐色土が主体となって入る。土壙内の礫を取りのぞくと遺構底部には4ヵ所のピットがある。遺構の底部は礫層であるが、その礫面にピットをこじ開けている。ピットは方形を基調とするものと長円形を基調するものがある。前者は長軸30cm~40cm、短軸26cm~32cm、深さ遺構底部から12cm~20cmである。後者は長軸50cm、短軸28cm、深さ18cmである。遺物は須恵器、土師器、珠洲焼、土師質土器、青磁がある。

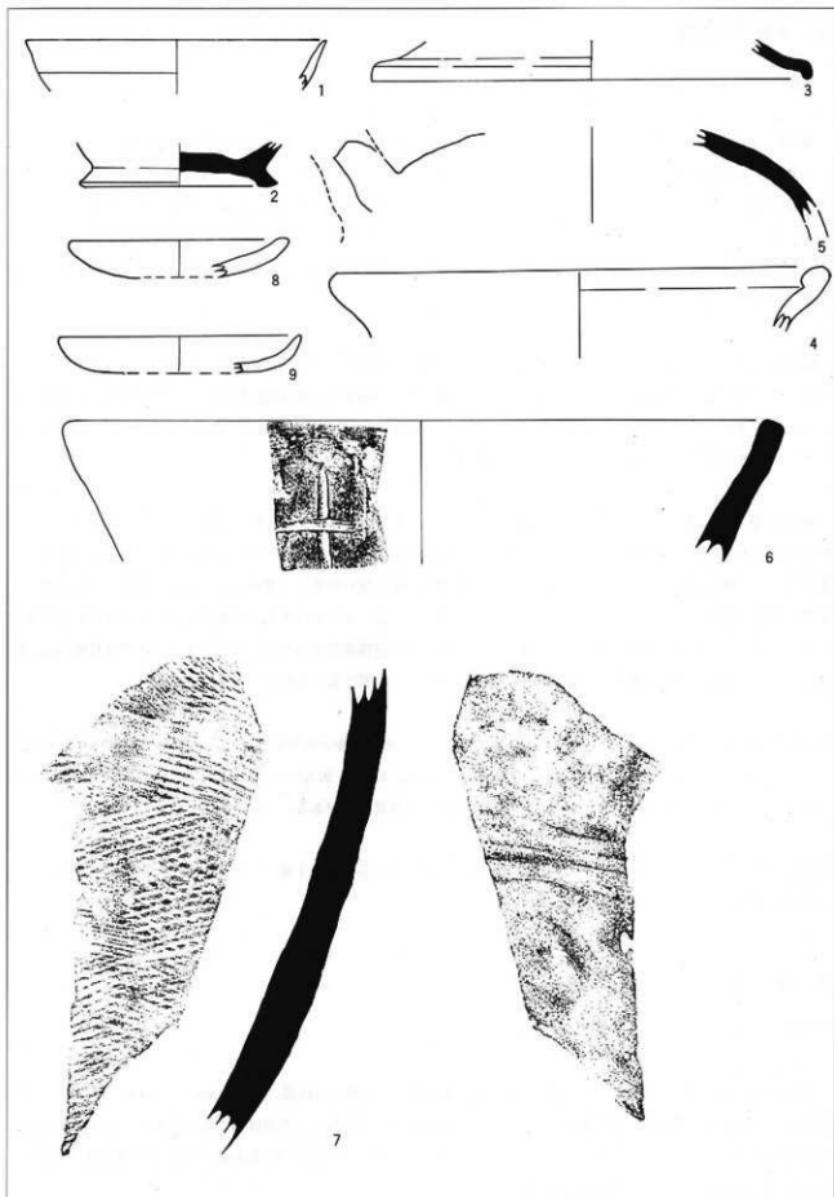
SX02（第16図）調査区の北部分、SK04の北側に位置している。調査区外東側に伸びる。SK04との関係はSX04に切られる。不整形な土壙で北西隅がやや張り出している。長軸は4.6m、短軸は1.6m以上である。深さは遺構検出面から50cmである。覆土は暗茶褐色土。遺物は須恵器、土錐、土師質土器がある。

SX03（第16図）調査区の北部分。SK05とSK06の間に位置する。不整形な土壙で、長軸2.85m、短軸1.2m、深さ36cmである。遺物は土師器と鉄製品がある。

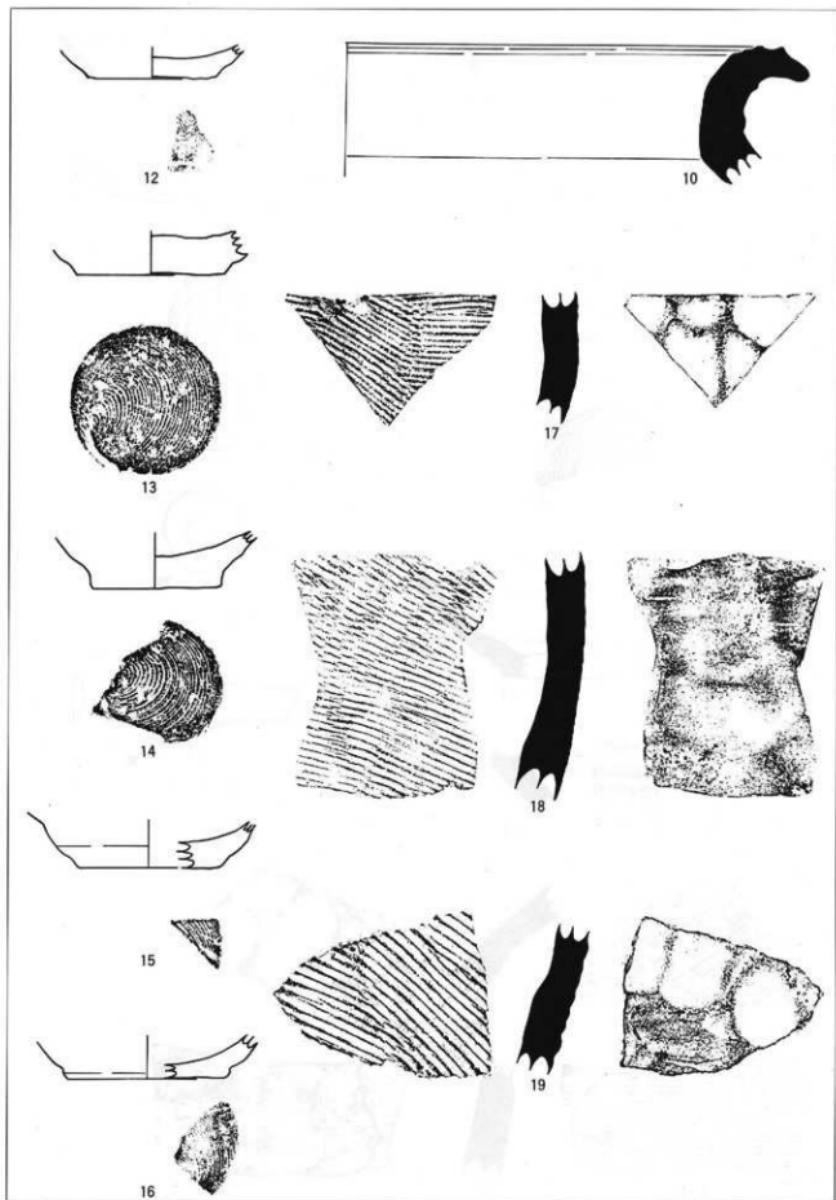
## 3. 遺 物（第8~11図）

SK01 土師器片がある。ともに摩滅激しい。

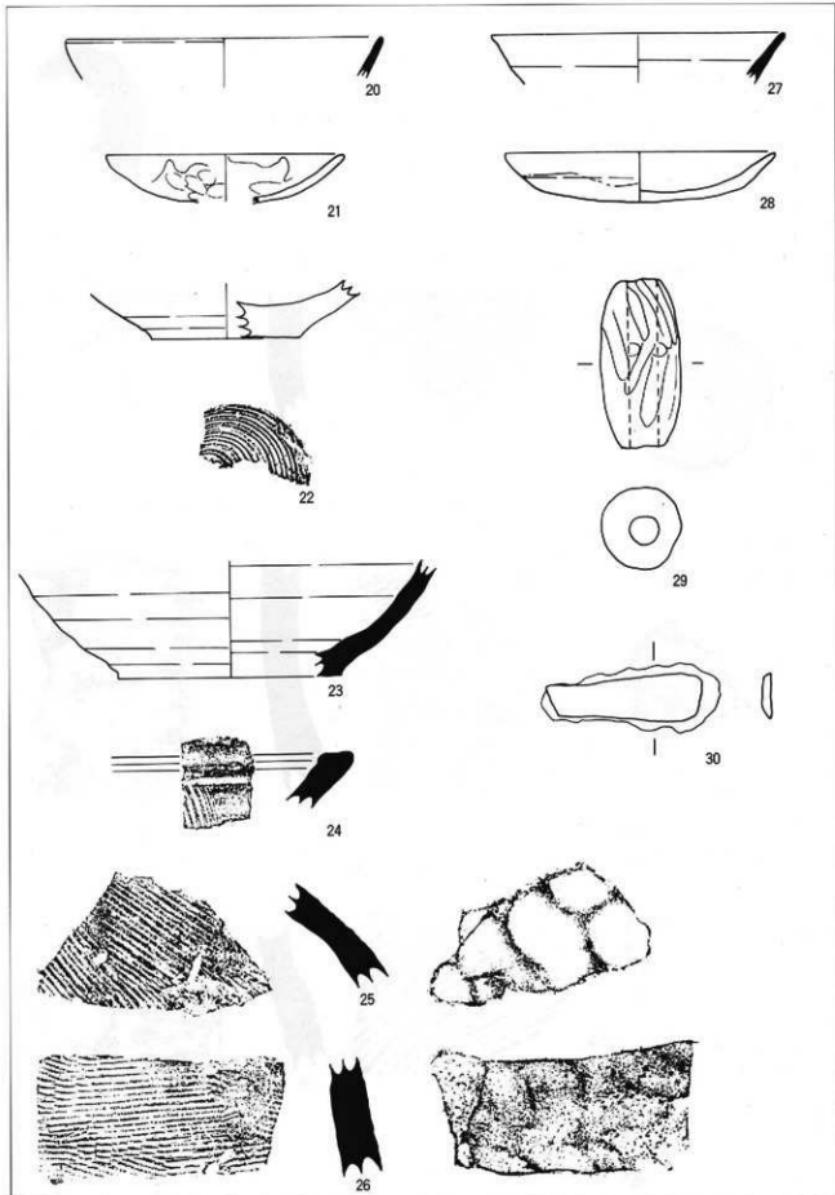
SK03 珠洲焼（甕）土師質土器がある。10・17は珠洲焼。10は甕の口縁部。口径は38cm。内外面ともヨコナデ。吉岡編年I期後半に属する。17は甕の体部。外面は綾杉状のタキを施し、内面は當て具痕跡あり。12~16は土師質土器である。すべて底部。底部は作り出しており、回転糸切りである。底径は5.3~6.4cm。14は高台が他に比べて高い。12・13以外は摩滅が激しい。時期は12世紀後半であろう。



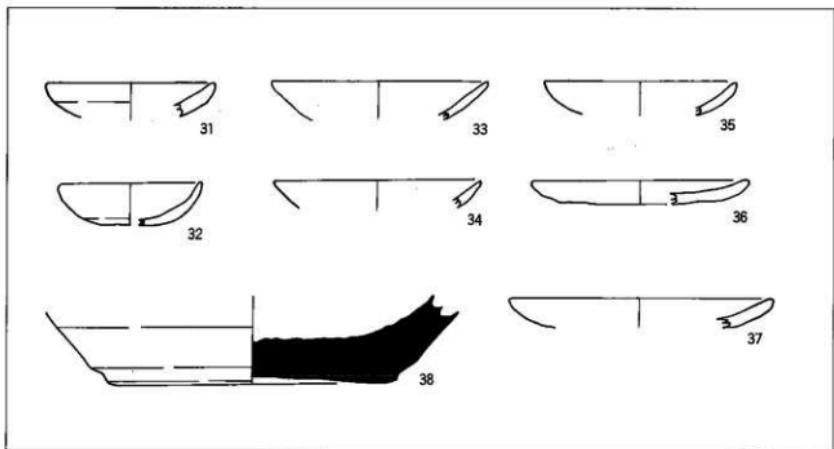
第8図 遺物実測図 SK05 (1:2)



第9図 遺物実測図 SK03(10・12~16)、SK05(17~18) (1:2)



第10図 遺物実測図 SD01(21~25)、SD02(26)、SX04(20)、SX02(27~29)、SX03(30)



第11図 遺物実測図 SK06 (1:2)

SK04 須恵器（杯？）土師器（壺）土師質土器がある。すべて摩滅激しい。土師器壺は体部で外面にタタキの痕跡が残る。

SK05 須恵器（蓋・杯・壺）土師器（碗・壺）珠洲焼（壺・水注）土師質土器、八尾焼がある。3は須恵器の蓋。内外面ロクロナデ。2は須恵器の杯。高台付き。底径は8.1cm。9世紀代と考えられる。1は土師器の碗の口縁部。やや外反する。4は土師器壺の口縁部。端部は巻き込むタイプ。9世紀後半。5・7・18・19は珠洲焼。5は水注。注口が若干残る。時期は吉岡編年Ⅰ期かⅡ期であろう。7・18・19は壺の体部。19はタタキが深い。8・9は土師質土器。8は口径8.9cm、器高1.6cm。器壁は厚い。13世紀代。9は口径10cm。14世紀代。6は八尾焼の壺鉢。外側には「十  
か」刻文がなされる。13世紀後半。

SK06 須恵器（杯）珠洲焼（壺鉢）土師質土器、八尾焼（鉢）青磁がある。38は珠洲焼の壺鉢。摩滅が激しい底径12cm。15世紀代。31～37は土師質土器。32は丸底を呈する。口径5.8cm。器高1.75cm。36は口径9.0cm。器高1.0cm。概ね14世紀代。青磁は枕の破片である。蓮弁文鏡。13世紀後半から14世紀前半。

SX01 須恵器壺片、土師器片がある。

SX02 須恵器（杯）土錐、土師質土器がある。29は土錐。土師質である。長さは7cm、幅は3.3cm、孔径は1.2cm。28は土師質土器。口径11.0cm、器高2.1cm。白っぽい胎土である。口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用したものである。14世紀代。

SX03 土師器、鉄製品(30)がある。30は刀子であろうか。

SX04 須恵器（杯・壺）土師器（壺）美濃瀬戸がある。20は須恵器杯。

SD01 土師器（壺・壺）珠洲焼（壺・摺鉢・鉢）土師質土器がある。23～25は珠洲焼。23は鉢。吉岡編年ⅠかⅡ期であろう。24は摺鉢。時期は14世紀後半から15世紀前半。21・22は土師質土器。21は内外面に煤が付着。14世紀代。22は底部回転糸切り。12世紀後半。

SD02 珠洲焼（壺）がある。

## V まとめ

今回の調査からは中世（12世紀後半から15世紀）の土壙5基、溝跡2条、ピットを確認した。しかし掘立柱建物などの居住施設は確認されなかった。

5基の土壙は平面形から i) 円形を基調としたものと ii) 方形を基調としたもののふたつのパターンに区分することができる。

i) にはSK01とSK03が該当する。SK01は礫を含む土壙である。時期は古代土器が出土しており、古代としておく。SK03は土壙として取り扱ったが、約1mほど掘り下げていることなどから、素掘りの井戸跡の可能性が高い。時期は出土した珠洲焼や土師質土器が12世紀後半に属するため、その時期にあてたい。

ii) にはSK04・SK05・SK06が該当する。SK04とSK06は礫が集中して含まれる土壙である。SK05は礫はあまり含まれない。前者はいわゆる礫充填造構で、規模は約3m四方である。おのおの時期はSK04が15世紀代。SK06は14世紀代に属すると思われる。

このように、居住的施設が確認されず、出土した遺物は破片が多く、遺物量も少ない。日常的な空間として頻繁に使用した地区であるとは考えにくい。この調査区周辺にはおそらく掘立柱建物などの居住施設が存在し、それらとの有機的なつながりがあるものと考えられる。

### ・礫充填造構について

礫充填造構は本遺跡の南約1.5kmに位置している南中田D遺跡や任海鎌倉遺跡で検出されている。両遺跡の事例については第12～15図に集成図として載せてある。南中田D遺跡からは21基、任海鎌倉遺跡からは6基確認されている。南中田D遺跡の礫充填造構を時期別、平面形別に分類すると次のようになる。時期別には、古代2基、中世5基、近世1基、時期不明が12基となる。中世のものが多い。確定な年代とし提えているのは15世紀のものが2基ある。

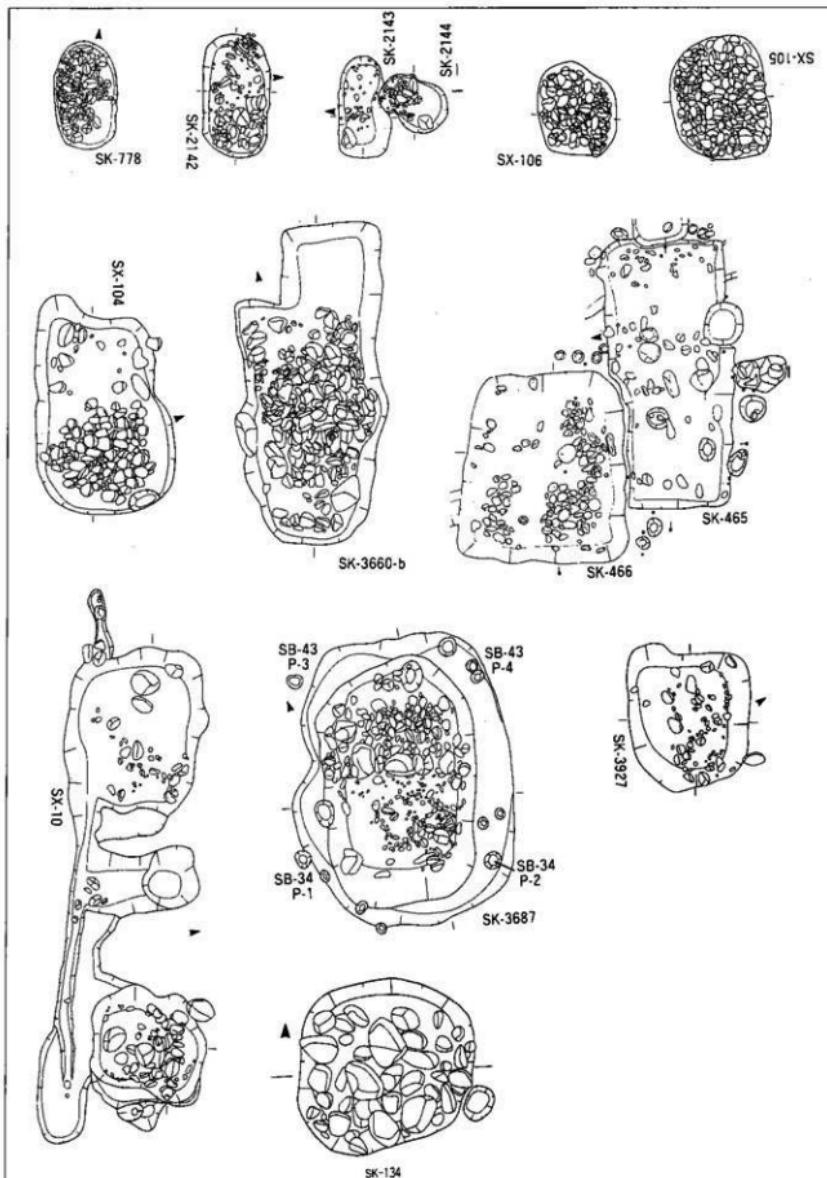
平面形では、次の3パターンが考えられる。Iタイプは円形のもの。IIタイプは長円形のもの。IIIタイプは方形のものである。Iタイプは2基あり、古代1基、中世1基である。IIタイプは9基あり、中世1基、近世2基、時期不明が6基ある。IIIタイプは10基あり、古代2基、中世3基、時期不明5基である。IIタイプとIIIタイプがほぼ同数あり、Iタイプは少ない。中世の時期に限りすべてのタイプを検出している。

この遺構は中世に検出事例が多く、平面形もI～IIIタイプのすべてを検出しており、中世に主体を置く造構と言えるであろう。造構の性格について礫の廃棄場所、墓的な施設と考えられている。

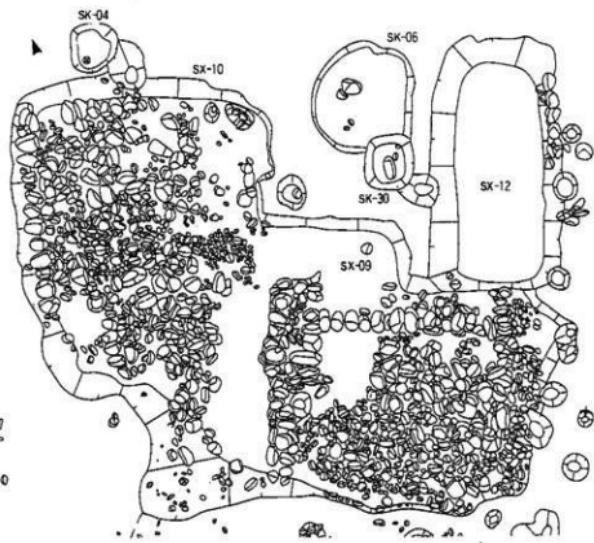
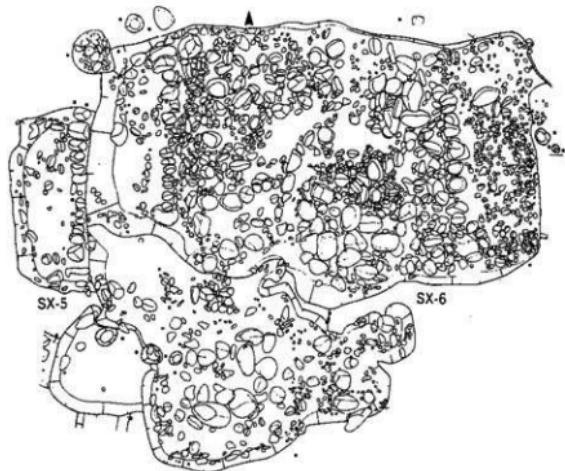
本遺跡の場合は、SK04、SK05はIIIタイプに該当する。両者とも方形をある程度意識しており、礫の廃棄場所というよりは墓的性格が強いと思われる。



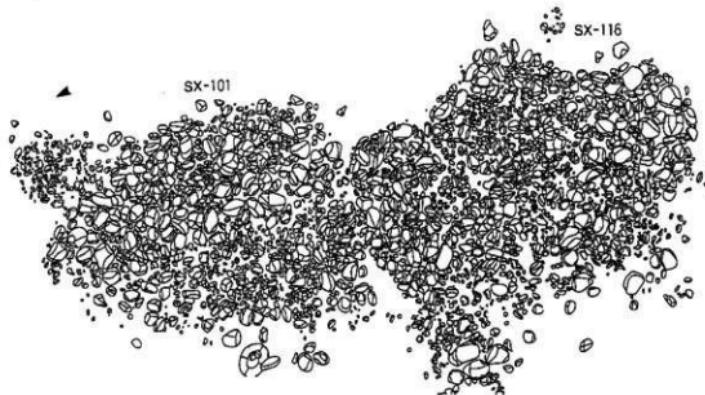
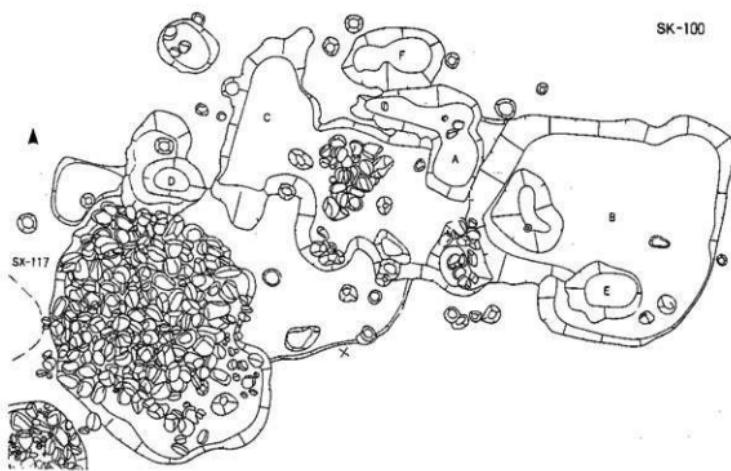
第12図 積充填遺構図(1) (1:80) SX-123任海錦倉遺跡 それ以外南中田D遺跡  
Iタイプ(SK-777、386) IIタイプ(SK-2181、2150、SX-3) IIIタイプ(SK-1085)



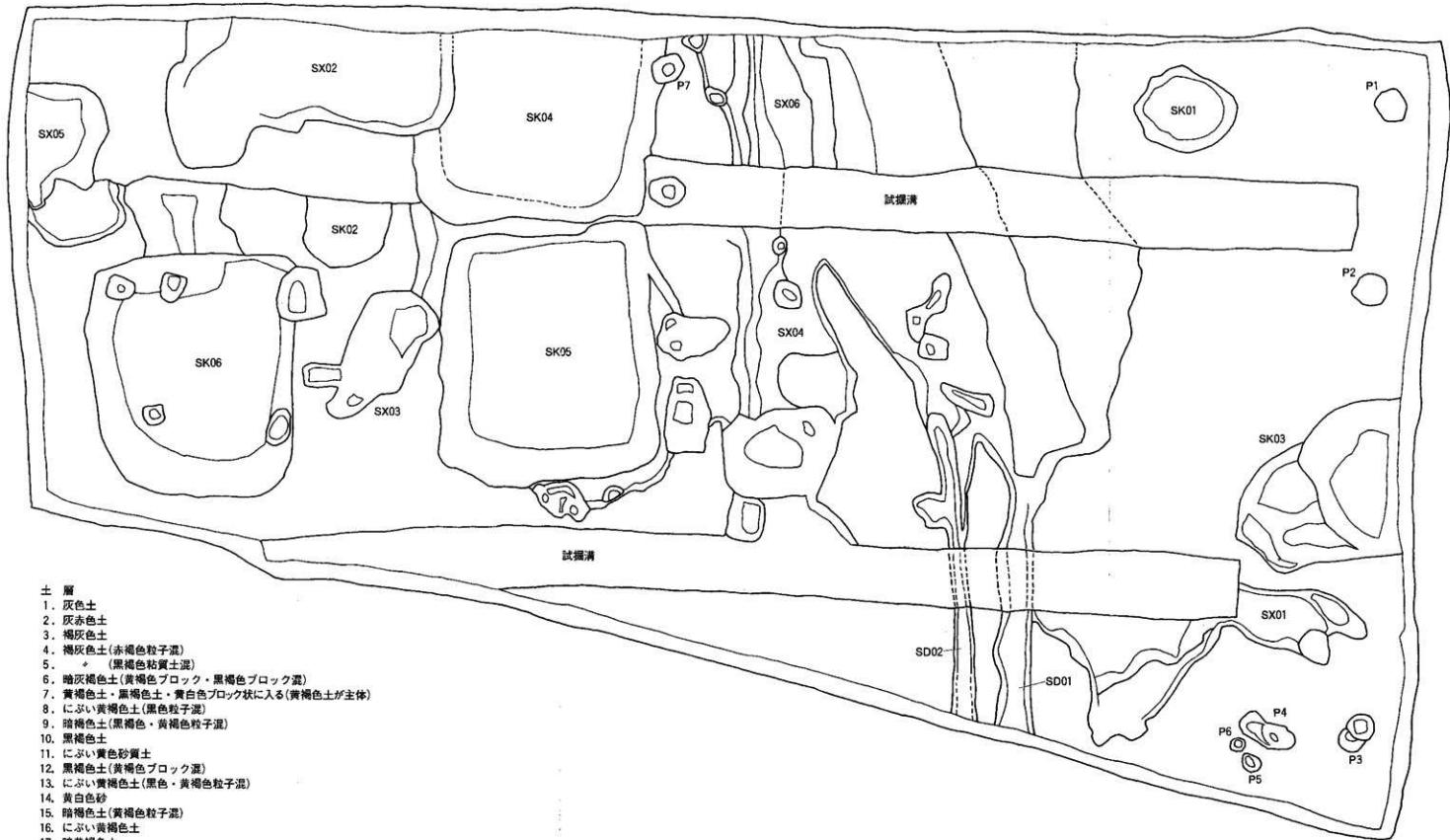
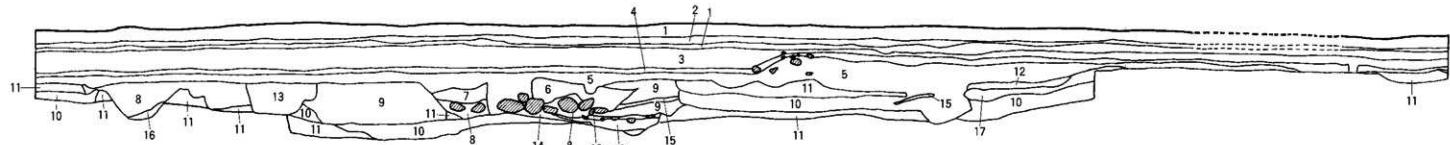
第13図 積充填遺構(2) SK134は1:40 それ以外は1:80. SK134任海縫倉遺跡 それ以外南中田D遺跡  
IIタイプ(SK778、2142、2143、2144、SX106、105) IIIタイプ(前番号以外)



第14図 磚充填遺構図(3) (1:80) 上 南中田D遺跡、下 任海鎌倉遺跡



第15図 磚充填構造(4) (1:80) 任海錦倉遺跡



**土層**

1. 灰色土
2. 灰赤色土
3. 棕灰色土
4. 棕灰色土(赤褐色粒子混)
5. " (黒褐色粘質土混)
6. 噴灰褐色土(黄褐色ブロック・黒褐色ブロック混)
7. 黄褐色土・黒褐色土・黄白色ブロック状に入る(黄褐色土が主体)
8. にぶい黄褐色土(黑色粒子混)
9. 黑褐色土(黒褐色・黄褐色粒子混)
10. 黑褐色土
11. にぶい黄色砂質土
12. 黑褐色土(黄褐色ブロック混)
13. にぶい黄褐色土(黑色・黄褐色粒子混)
14. 黄褐色土
15. 黑褐色土(黄褐色粒子混)
16. にぶい黄褐色土
17. 噴黄褐色土

第16図 造構配図 (S = 1 : 50)



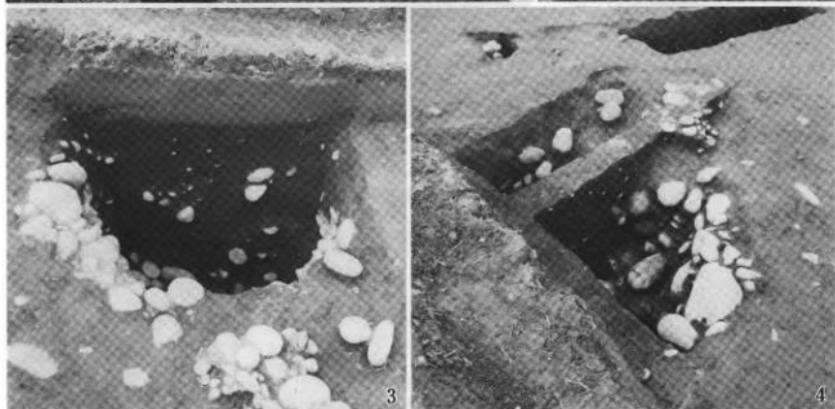
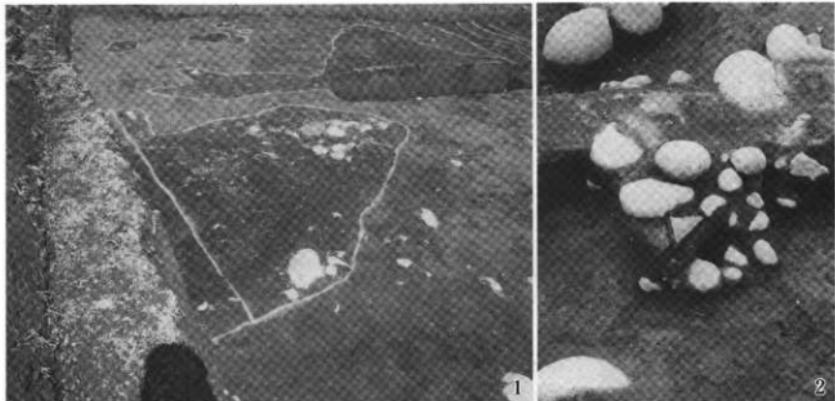
1



2

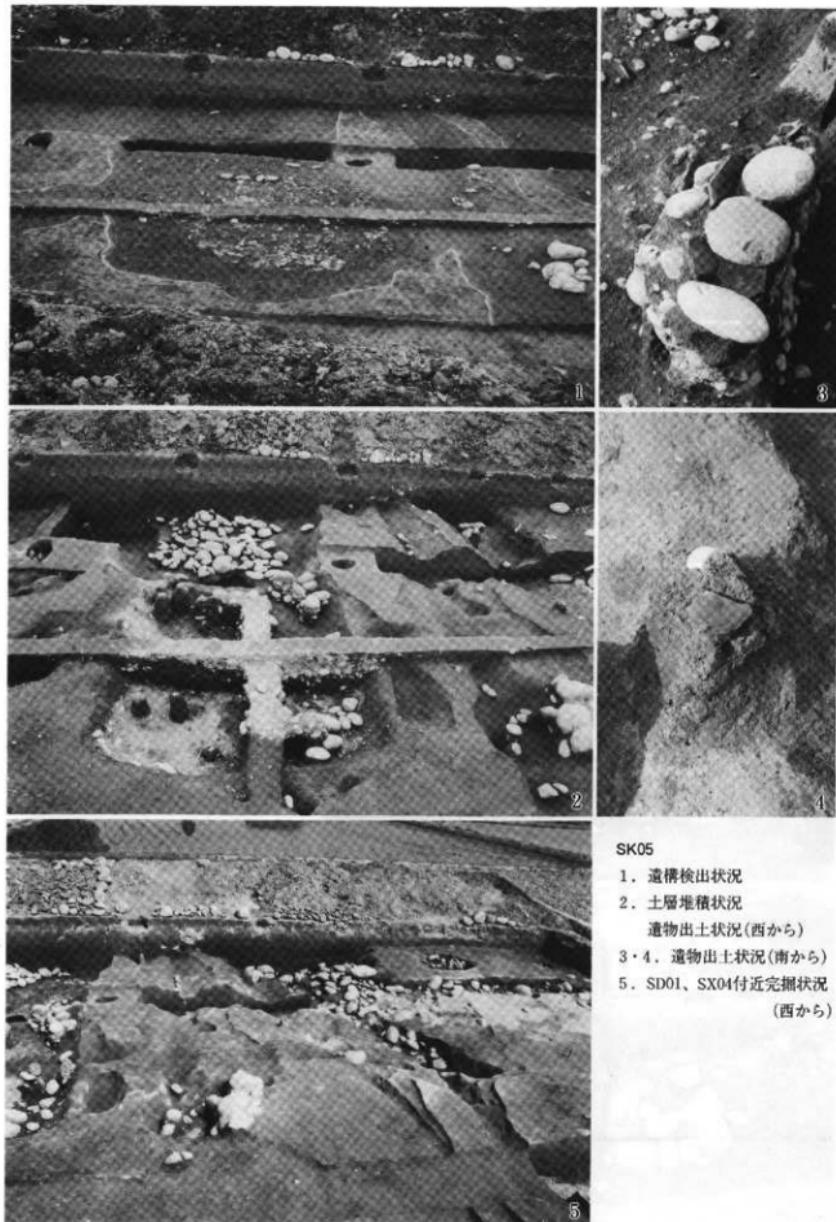


1. 調査区全景(北から)
2. 遺構検出状況(西から)
3. 調査作業風景(南から)



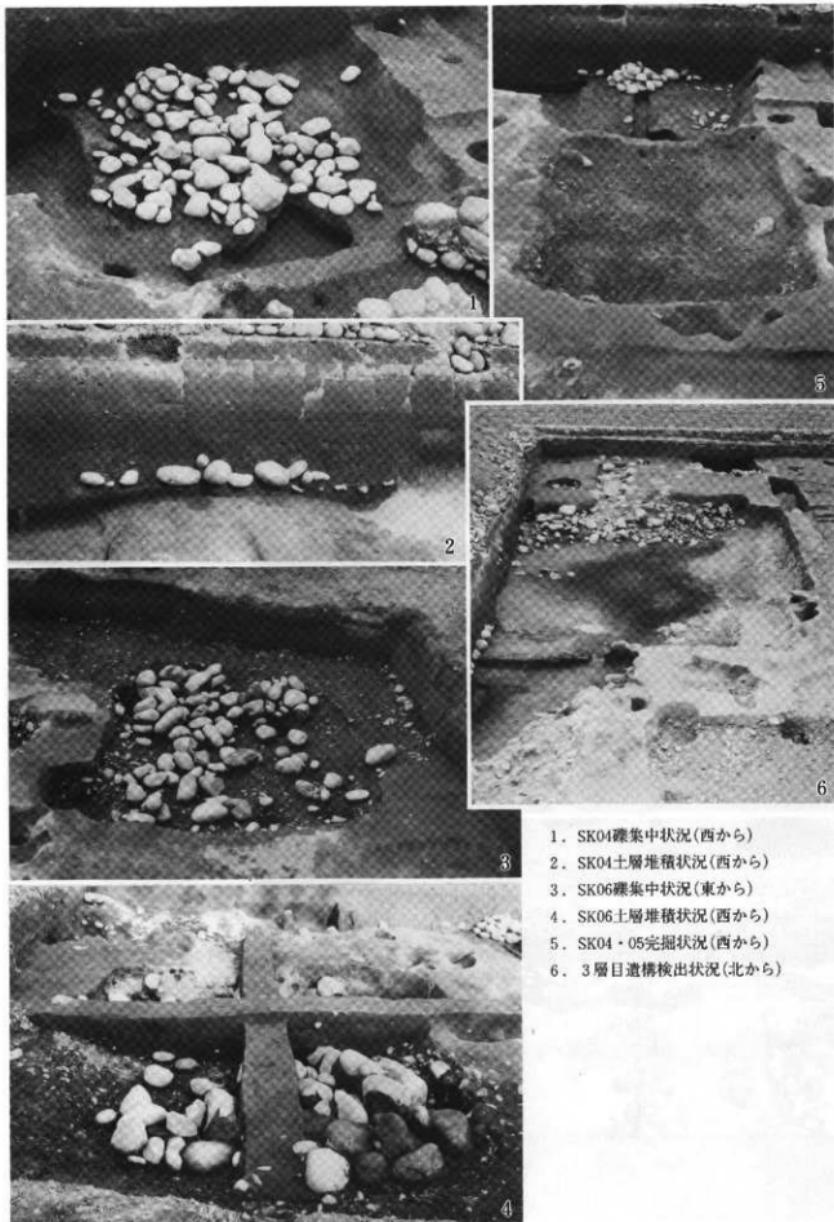
SK03

1. 検出状況(東から)
2. 遺物出土状況(東から)
3. 土層堆積状況(北から)
4. 遺物出土状況(東から)
5. 完掘状況(南から)

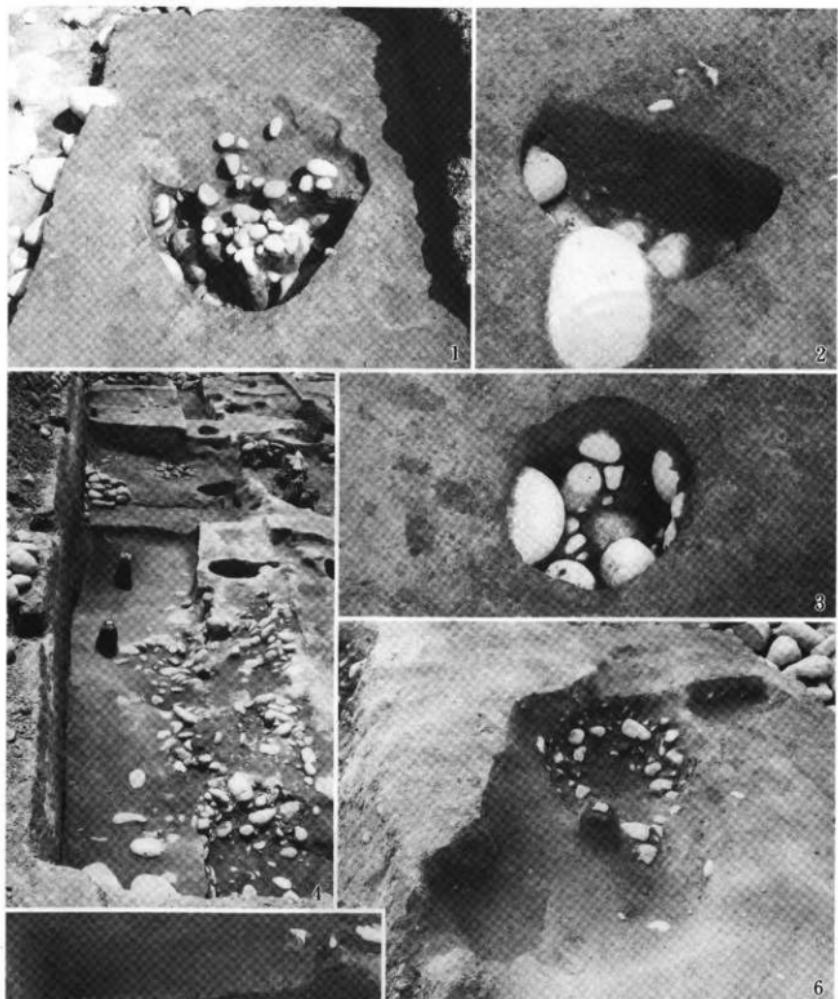


SK05

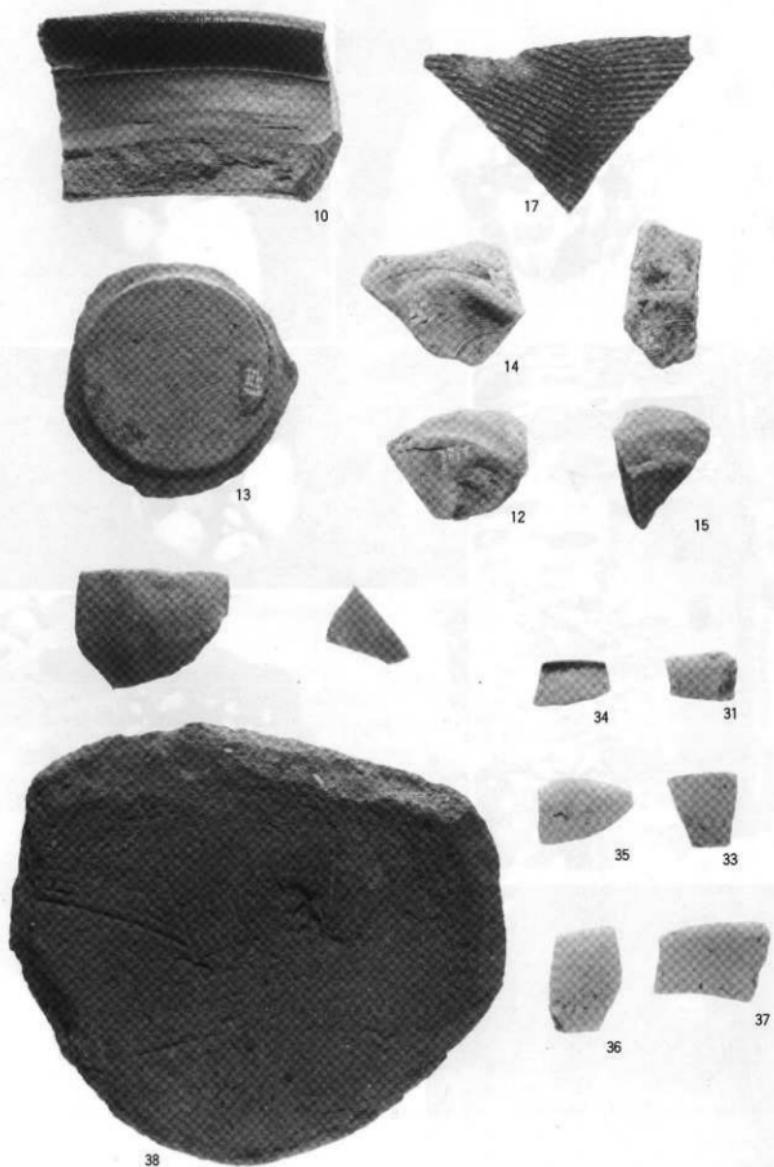
1. 遺構検出状況
2. 土層堆積状況
- 3・4. 遺物出土状況(西から)
5. SD01、SX04付近完掘状況  
(西から)



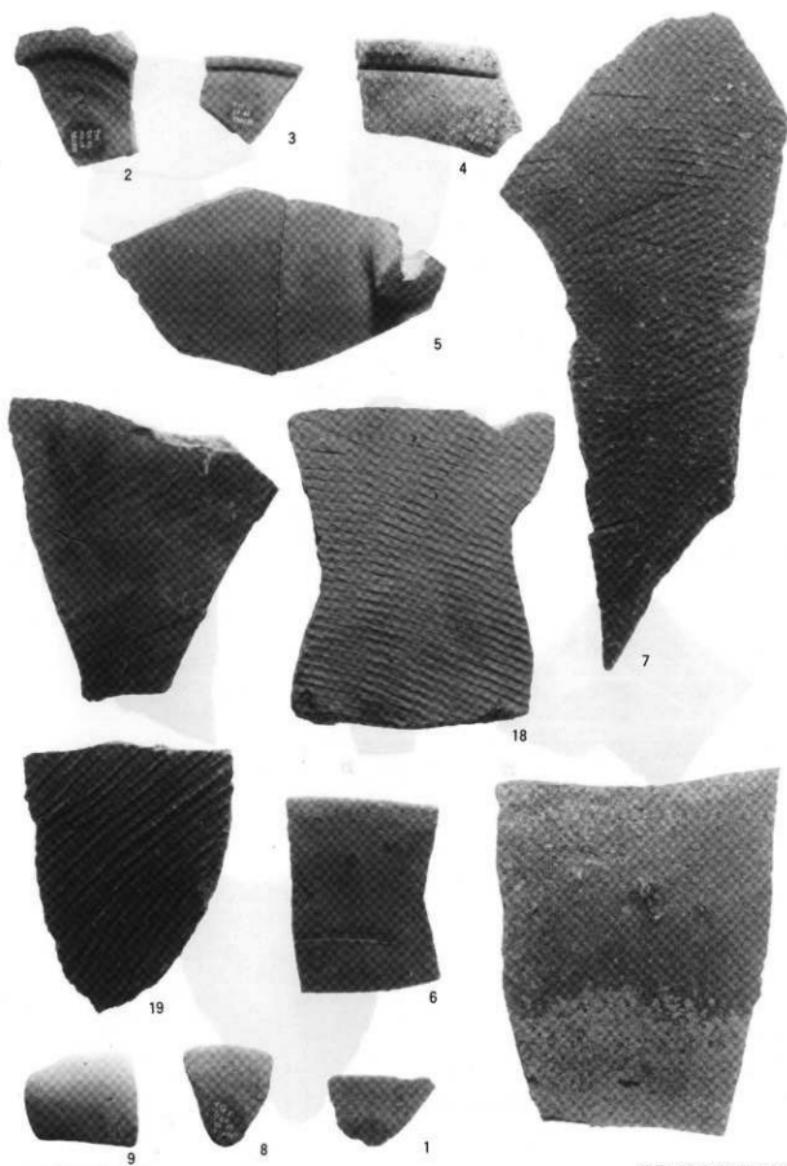
1. SK04 瓦集中状況(西から)  
2. SK04 土層堆積状況(西から)  
3. SK06 瓦集中状況(東から)  
4. SK06 土層堆積状況(西から)  
5. SK04・05 完掘状況(西から)  
6. 3層目遺構検出状況(北から)



1. SK01出土状況(南から)  
2. P2土層堆積状況(西から)  
3. P1完掘状況(南から)  
4・5. SX02遺物出土状況(北から・西から)  
6. SX03遺物出土状況(東から)



番号は遺物実測図と対応



番号は遺物実測図と対応



27



29



28



20



22



21



25



23



番号は遺物実測図と対応

## 報告書抄録

ふりがな	とやましとうみみやたいせきはつくつちょうきがいよう						
書名	富山市任海宮田遺跡発掘調査概要						
編著者名	堀沢祐一						
編集機関	富山市教育委員会						
所在地	〒930-0005 富山県富山市新桜町7番38号 TEL0764-43-2138						
発行年月日	西暦 1996年 3月 29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'."	東經 °'."	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
任海宮田遺跡	富山県富山市任海字大冢割	16201 501	36度 37分 50秒	137度 12分 17秒	19950420 ～19950531	165m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
任海宮田遺跡	集落跡	平安・中世	礎集中土坑3 穴、溝；井戸跡	須恵器、土師器、土鍤、 珠洲焼、土師質土器、青 磁、八尾焼、鉄製品 美濃瀬戸、近世陶磁器	礎集中土坑は、墓の可能 性が指摘されており調査 区内に住居跡が存在せず、 周辺集落の墓域と考えら れる。		

**富山市任海宮田遺跡発掘調査概要**  
—個人住宅建設に伴う発掘調査—

編集・発行 富山市教育委員会  
富山市新桜町7番38号  
発行日 1996年3月29日  
印 刷 所 富山スガキ株式会社